

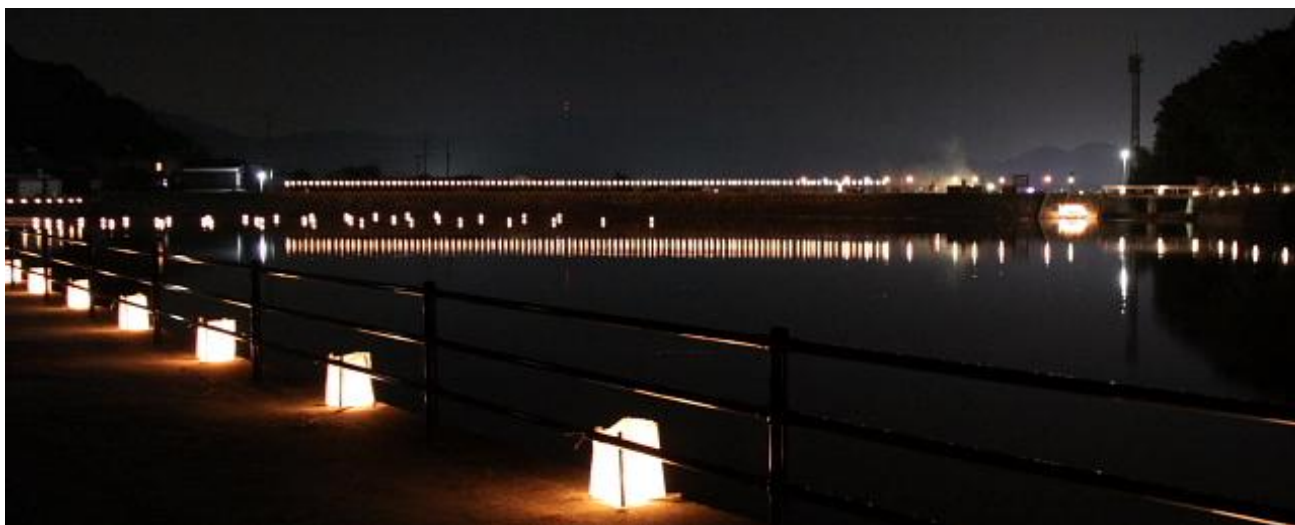
おいしいけ

発行 くさかべ大池公園愛護委員会

第9回くさかべ大池公園の夕べ (2010.8.13~15)



夜空に輝く万灯



水面に映える灯り

草ケ部に果物の出荷組合が結成されたのは明治44年(1911)で、今年は100周年にあたります。

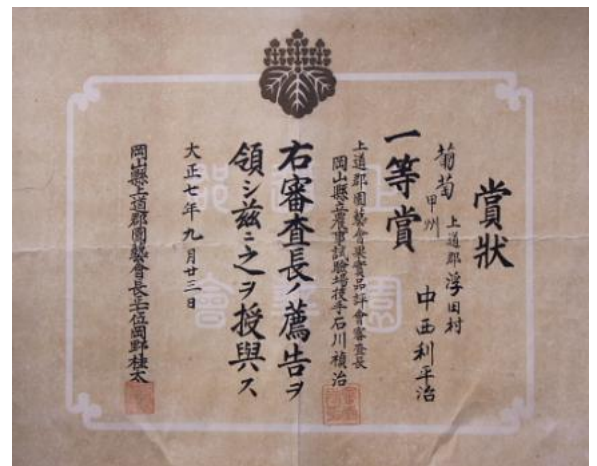
岡山の果樹園芸史をひもといてみると、「明治41年(1908)、上道郡浮田村草ケ部光森正郎氏は、葡萄の水田作を着想し、キャンベル・アーリー、ナイヤガラ、ハイランド、レディワシントン、ハーバードの5種を購入し、最優秀田(一等地)1反3畝歩に栽植し、当時嘲笑の的とさえなったが、キャンベルの成績特に優秀で(反収1、200貫、単価50銭)、後日大集団栽培地の緒口となったが、明治44年同志16名は可真村からキャンベル苗木を購入し、水田栽培(垣作り)を大々的に開始した。(果物月報昭和2年2月号)」と記されています。

東組の光森正郎さんは、わずか13アールの葡萄園から、米一俵が5~6円の当時に100俵もの収益を得たことから、「葡萄で金がとれる」と村人の関心を大いに高めたそうです。

草ケ部に初めて葡萄が導入されたのは明治38年から9年の頃なのですが、それまでは甲州葡萄が庭先に植えられていた程度なのです。

写真は、大正7年に大池のほとりの5アールの畑で西組の中西利平治さんが栽培していた甲州葡萄の品評会での賞状ですが、昭和4年頃には草ケ部でもマスカットの温室栽培が始まっています。

山陽線の瀬戸駅からマスカットを担いで姫路や神戸の市場に運んで儲けて、瀬戸の風月楼やカフェで100円札を仲居や女給に見せびらかして遊んでいたという良き時代の話が長老からたびたび聞かされたものです。



また山陽線の車窓から眺めると、小廻山の麓の草ケ部の集落は、二階建ての瓦葺きの大きな家並みが目立つことから、戦前から草ケ部の葡萄御殿として評判でした。

昔はサトイモやサトウキビなども

草ケ部には昔から約100戸の農家があって、古代の条理制時代からの豊穰な水田がありますが、一戸あたりの水田は平均50アール程度しかなく、米麦だけでは生計がたたないため、昔から雑穀やサトウキビ、サトイモなどを栽培するなどして生計を補ってきたようです。

米麦に頼るのではなく、現金収入を求めて畑や裏山を開墾して特産物の栽培にチャレンジしてきた先祖からの気質が伝わってきたのではないのでしょうか。

何時の時代でしょうか、昔は港町として栄えていた牛窓までサトイモを担いでいって、儲けたお金を元手に大地主になったという話もあります。

また中組の四辻や西組には、戦後の砂糖が不自由なとき、砂糖キビを絞って煮詰める共同の砂糖小屋が建てられていました。

サトイモは水はけの悪い水田、サトウキビは水の不自由な山の畑に栽培していたのかも知れません。

桃や梨も盛んに栽培されていた

明治政府は果樹の導入を奨励していましたが、上道町史によると明治28年(1895)に砂場の松本利平治という人が、草ケ部に約1ヘクタールの梨を栽植したのが最初で、明治37年の日露戦争当時は、浮田村全体では梨を主体とした果樹園が20ヘクタールもありました。

向山や大山、そして佐山などには戦後まで梨の畑が残っていましたが、キャンベルに次第に改植されていきました。

法追谷の奥の佐山には今でも愛宕梨やキャンベルの畑が残されてはいますが、ほとんどが姿を消しています。

写真は今から約30年前に撮影した佐山の小林牧場の近くのキャンベル畑の中に残された梨小屋

ですが、中組の向井さんによると、小屋の中には大きな甕があって、収穫した梨を詰め追熟して出荷していたそうです。

今でもキャンベルの完熟した独特の甘い薫りを懐かしむ人がいますが、キャンベルは房作りの手間が掛からず栽培も容易でしたが、夏の干ばつには弱く、収穫間近になって萎えてしまうのが悩みの種でした。

そこで吉井川の豊富な水を山まで引き上げて畑を潤す、国営の大規模な畑灌事業が計画され、一日も早い完成を待ち望みましたが、折から高度成長の時代、若者はサラリーマンとして都会で働くようになり、山頂まで灌水パイプが敷設された時には、先人が汗を流して開墾した葡萄畑には雑草が生い茂り、農家には負担金の支払いのみが残されてしまいました。

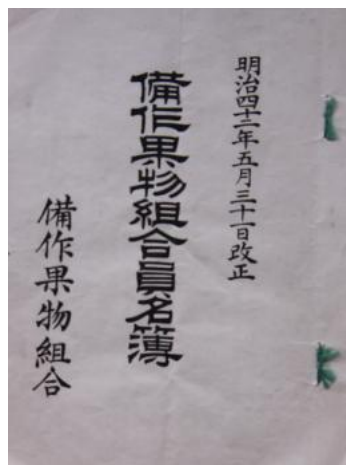


ちなみに「続岡山の果樹園芸史」によると大正14年(1925)には草ヶ部では89戸が20町歩の葡萄を栽培していました。

「浮田村。葡萄45,000本、梨8,050本、桃2,100本、梅270本、柿200本、洋梨100本、蜜柑50本、枇杷20本、夏柑20本。内草ヶ部89戸葡萄20町、晩三吉、赤龍、桃(金鷄 = 新白桃)。甲州三尺、富有、硝子室葡萄、柑、枇杷」

備作果物組合名簿に見る果樹栽培の先人

草ヶ部に果物の出荷組合が設立される8年前の明治36年(1903)には、赤磐、上道、和気、邑久郡など旭東4郡の果物栽培家が、桃や梨等の共同販売を目的とした備作果物組合が結成され、山陽線の万富駅に果物組合本部、瀬戸、西大寺、和気の3駅に支部を置いて全国に出荷していました。



明治42年5月31日に改正された備作果物組合申合規約と組合員名簿によると、草ヶ部では城東園の光藤(三藤)亀太郎さんをはじめとして34名が加入しています。当時はまだ葡萄は本格的に導入されていないので、梨や桃の出荷を目的に加入したのではないのでしょうか。

城東園			全村大字草ヶ部			全村大字北方			全村大字中尾			全村大字谷尻											
井上甚吉	上松元次郎	光藤龜太郎	安倉伊三治	三宅金太	南葉久造	三宅磯五郎	南葉鹿次郎	三宅貞治	植田新三	上田彌代吉	藤原清三郎	藤原鹿三郎	内藤一次										
寶玉園	國定静太	廣田藤太郎	石原孫七	石原小三郎	上村晉松	井原長次郎	中西貞治	坂根徳吉	上松春三郎	青井節治	國定親正	廣田喜次郎	上松樫造	宮本太三郎	宮脇秋太郎	國定義太郎	中西利平治	羽原甚次郎	羽原清治	青井虎吉	坂根喜三郎		
寺尾武太郎	遠藤庄吉	水内八百三	水内幸太郎	水内卯一郎	田中與徳太	田中甚吉	西崎嘉太郎	小坂幾三郎	藤原安造	坂根恵三郎	石原本治	廣田廣吉	八代友吉	青井藤吉	中島織治	羽原藤五郎	國定信吉	國定勸六					

桃については、果樹園芸史によると、草ヶ部の安井虎三郎さんが明治30年に上道郡で初めて桃の栽培をしたと記録されています。調べてみると安井さんの住んでいた家は字草ヶ部ですが沼の本村にあって、上道墓地公園あたりの畑で桃を栽培していたようです。

桃太郎の父親は草ケ部で生れた！

皮ごと食べられて、種なしの葡萄として商標登録されている「桃太郎ぶどう」が話題となっていますが、この葡萄の品種登録名は「瀬戸ジャイアンツ」。このややこしい名前の葡萄は瀬戸南高校(瀬戸農)の元教師の花沢茂氏がネオ・マスカットとグザルカラーというロシア原産の葡萄を交配して昭和54年(1979)に育成したとされて、平成元年(1889)には品種登録されています。

ネオ・マスカットは草ケ部の中組の広田盛正さんによって大正14年(1925)に「マスカット・オブ・アレキサンドリア」と「三尺」を交配して育成し、昭和7年(1932)に命名されました。

まさに「桃太郎ぶどう」の父親であるネオ・マスカットは草ケ部で生れた葡萄です。

広田盛正さんは明治25年(1892)に中組で生まれ、昭和48年(1973)に亡くなりましたが、明治43年(1910)に岡山中学校を卒業した秀才でありながら家業の果樹栽培に従事、大正元年(1912)には草ケ部に初めてガラス温室を作り、甲州や信州などの果樹の先進地を歴訪、そして昭和3年(1928)から3回にわたってフ



ランスから77品種の葡萄の苗木を自費で直輸入して理想品種の選抜と育種研究に没頭したとのことです。大正14年(1925)にはネオ・マスカットの育成に成功、ヒロハンブルグ、ネオ三尺、紅三尺などの新品種の葡萄を育成しました。

とくにネオ・マスカットは露地でも栽培できるため、今でも山梨県など全国で盛んに栽培されています。広田盛正翁の功績を讃えた顕彰碑が昭和46年(1971)に草ケ部の東に建立されています。

編集後記

「くさかべ大池公園の夕べ」は、記録的な猛暑の中、多くの皆様にご協力いただき無事に終了しました。

夜空に輝く万灯は、子供たちの夏休みの記憶として何時までも残ることでしょう。

今号はこれまで見聞きした草ケ部の果樹栽培の先人の活躍を書き留めてみました。

皆様からのお話しや、ご投稿を楽しみにしています。(中西)



大池のお地藏さんと百日紅

実南天げに刻々と朝づく日
大西風や総点検の漁師町
木もれ日をこもこも浴びて眼白かな
森 冬至生

連絡先 くさかべ大池公園愛護委員会事務局

岡山市草ケ部196 中西 厚方 電話 086-297-5887

E-mail nakanishi@kne.biglobe.ne.jp

http://www7a.biglobe.ne.jp/~nakanishi/